

劇あそびの計画と実践



関 恵 美 子

幼稚園の劇あそびと言えば、立派な衣裳を身につけて直立不

動をしてまわらぬ舌で台詞を言う、先生は配役に頭を痛め、お母さんはその衣裳を競う、子どもたちは物珍らしくお祭り気分
で、それでも、ちよっぴり、昨夜も一生懸命に憶えた台詞を、
間違ひなく言わねばならぬつらさがある——。こんな受身なも
のでは、子どもたちの成長の上に何の意味もないものだという
ことを、経験を通して語っていきたいと思います。

劇あそびというものは単なるまね遊びではなく子どもの生活
のしめくりであり、今まで遊びを通して培かれてきたもの
の総決算でもあります。子ども一人ひとりの身につけてきたも
の、或いは身についたものを、充分に發揮させる絶好の時

でもありません。

私たちが毎日の遊びの中で一人ひとりに身につけさせようと
して、ねらってきたものは何であったでしょう。

それはその子自身で、ものを見たり、感じたり、考えたりで
きるということでありました。一つの経験の中からどれだけ多
くの自分なりの把握をしてゆくかということ、与えられたもの
を受け止める以外に更に自分なりに求めてゆこうとする前向き
の生活の在り方をもつことであるべきです。

こうして育てられたその子のよきものが友だちの中でしっか
り認め合われ、支え合われて自分の場としてはっきりその価値
があり位置づけられてこそ劇あそびが子どもの生命を高めてく

れると思うのです。

そこで劇あそびは子どもが創ってゆくものであるということ
を考えてみましょう。

物語りの心というものを一人ひとりの子どもがしっかりと深く
攪んで物語りの中に自分を没入して遊んでゆける時間を充分
もちましよう。そこからその子その子なりに考えたりためした
りしながら、次第に一層深い興味と共感と追求心をもちます。

こうして自分で納得したもの、自分で捉えたものから、動作と
なり、ことが生まれ、作品が創られ劇あそびを構成してゆき
ます。

そこで先ず

△動作について▽

子どもはお話の中に出てくるもの（動物とか人間とか）にな
って好きなように遊んでみたいという気持ちを持ちます。これを
自由遊びで充分にさせましょう。そのものになり切って自分を
すっぽりその中にはめ込んで遊んでいる姿に励ましと自信を与
えてゆきます。こうして一つの動物の動きにも各自それぞれの
表現の仕方が出てくるわけです。みんな個々のよさがその中に
認められます。時々その動物についての気持や生活を知るため
にみんなで話し合います。物語りの範囲だけでなくもっと巾広

くその動物の生活を知らせておくわけです。

こうして一つのものに対していろいろな角度から把握したも
のが大きくて深い程そのものへの没入感も深いので、ここから
本物の動作が生まれてくるわけです。

例えばお話「鬼のひっこし」に出てくる鬼についてその物語
りの中での鬼ということではなく、もっと鬼一般について自分
の思っていることを自由に話し合います。

- ・鬼は天狗のことだ
- ・強くて恐くて角は二本あるの

・角は一本あって悪いことをしたら二本になるの

・赤い鬼も青い鬼もあるけれど赤い鬼の方が偉い

こんな自由な話し合いから子どもたちが鬼に対しては、暴れ
ん坊で悪いことばかりしてという悪のかたまりのように考えて
いることが分ります。これはたいへん大事なことで、この物語
では後半鬼が弱音を吐くところがあるからです。はじめからこ
んな鬼の弱さや淋しがり屋を肯定してかかるよりきんぎん悪い
ことをしておきながら、やっぱり心淋しいものをもっていたと
いう人間臭さ、そんなものをちょっぴりわからせるためにも、
うんと鬼の悪さで自由に遊ばせることだと思えます。

足を踏みならし、顔まで鬼にしてありったけの力を出して

強さを出して遊び始めます。もっともっと見ただけでも恐
そうにしようと考え始めます

鬼についての他の話もいろいろ聞かせます。そうして鬼とい
うもののイメージがいろいろふくらんできます。物語りの中の
鬼が次第にいろいろな心をもった鬼になってきます

こうして子どもが本当に鬼が好きになり、鬼になり切れるよ
うにしてやることこそ本物の動作をさせることだと思えます。

一つ一つの動作の形を教えるのでなく、その心を掴ませ、そ
のものになり切れさせることが大事でそこからは子どもが形を
その子なりに自由に生み出してゆくものです。

△ことばについて▽

劇と言えはことばは何となく大きく位置を占めるように考え
られますが幼児の場合少ない語彙の中からその心をことばで表
わすのには大へんな抵抗があります。口うつし的なことば、ま
る憶えさせるようなことばなど、与えられたことばでなくて子
どものそのものへの把握の深さの中から自由に生まれてくるこ
とばでありたいと思えます。

そこで子どもの中から生み出させましょう。教師が考えるよ
り、もっともっと生活に密着した子どもの心が生きている素晴

しいことばが生まれてきます。つまり一つ一つのことばに必然
性があります。このことは大切なことで、ここで何を言うかと
いうことではなくてその時にはもう自然に子どもの口から、そ
のことばが生まれてくるということになるからです。

そのためにも、子どもがそのものをどれだけ理解し感じ、そ
してその思いを卒直に語ろうとしているかということを受け止
めてやることが私たちの仕事になってきます。

ことばというものは、その心が子どもの中でじっくり暖めら
れ、練られてから後に出てくるもので多くのことばを要求した
り上手な言いまわしを歓迎したりするようなことを慎しみたい
と思えます。もっと素朴でありのままさを、ぼつんと言う一言
にもいろいろなこまやかな心がくみとれるような大事な価値を
つけておきたいと思えます。

例えば「ぎざぎざ鬼の耳」の中で白鳥のお母さんが卵をあた
ためている時、ちょっと水を呑みに出かけたその間に、わしに
追われ必死で逃げてきた鬼が卵を割ってしまったという場面で
のこと。

「白鳥がもどって来て割れた卵を見て、とても悲しんだ。」と
先生が話すと「ごめん言うて謝まったの？」と言うのでそれ
について子どもの思いを聞いてみました。子どもたちは先日

来遊びの中で自分でも予期しないで他人の作ったものを毀し
自分も申しわけないし、相手には怒られるということがあ
ったことから、積木の場合は修繕もできるけれど卵となると
毀れたらその生命がなくなるのでどうするだろうと、とても
気になった様子でした。

このことは遊びの中でもなかなか本当のことは生まれきて
ませんでした。本当にどうしようかと困った様子で誰も見てい
ないで草の中へ割れた卵をかくしたり、「お母さんこんな事し
てしまった、くつつかないよー。」と自分の兔の家へ帰ってゆ
く子、結局どんなに謝られても許せない気持の白鳥のお母さん
に割れた卵を抱いて「ごめん。」と小さく呟くことになりました
たが、どんなたくさんのことはより一番子どもの動きと心にび
ったりして、しかも一番多くの許して欲しい気持が出てしまし
た。それから子兔のこの窮状を一しよに謝まってくれたわしの
子どもと仲よくなりましたが、お母さんはわしと仲よしになる
ことは止めさせたいと思っています。或る日一しよに遊んでい
るところを見つかって叱られる場面でのことば

- ・この子と遊んだらいけません
- ・恐いわしの子ですよ
- ・連れていかれますよ

・食へられるよ

・もうすぐしたら 恐いわしになるから

・遊んだらいかんと繰り返すばかりの子

・おいしいものあげるからこっちへおいで

・今は白いけど黒い羽が生えたらこわいよ

これらのいろいろなことはの中から子どもたちがこの気持を
どんなふうに理解しているかが分ります。どれも自分の問題と
して語っていることはだと考えます。こうしてその心の把握に
つれて次第にことは深く変わってきますしそのことを私たちは
大切な足がかりとして、子どもの思いの深まりをことはの高ま
りとして育てたいわけです。

△製作について▽

子どもが遊んでいる中に、こんなものがあつたらいいなあど
か、これを作ってみようということから製作が始まります。劇
あそびに使う製作品の一つ一つが、こうして子どもの遊びの中
からの要求によって創り出されてゆくわけです。だから一つの
ものを創るのにあくまでも自分の使うもの、或いは自分のその
時の動作に役立つものという鮮明な目標がありますので動作と
結びついた製作品が生まれてきます。

遊びの中からそれは乗れるものでありたいという気持が立体を思いつかせませす。丈夫であることが大切になってきます。そのだ空箱を使ってみようと考えます。どちらから見てもそのように見えることのためにまわりの工夫が出てきます。

或いはこれはどうしても動くものにしなければ使えないということから動くことへの追求が始まります。

こうして子どもの気持が意欲を、工夫を実らせてゆきます。教師はできるだけ多くの材料を用意します。そして子どもの気持を満たしてやるためにも一しよに考えてゆきます。

この時決して前へとび出さないこと。あくまでも子どもの力を助けることにまわりましょう。たとえそれがどんなに充分なものでなくてもその製作にはその劇あそびのその心が出ているものでいいと思います。見た目の美しいというおとな的なものに心を費すより子ども心が溢れているもの、そのためにも自分のしよんとする製作物への不確かな場合は、もう一度そのものにふれさせて確かめさせたり、心に一杯あるのに表現能力の足りなさから充分出せないで困っている子の相談相手になったりするに重点をおきます。

例えば「ペンギンの話」という劇の中で氷が必要になってきます。この氷に乗ったり氷が流れて動いたりお日さまに映えて

大へん美しいということこんな氷が作りたいたいということが出てきました。そこで氷で暫く遊んでみました。

○プール足洗場に前日に水をはっておき氷を作りました。それで遊んだ後の話し合いで

・プールのところに大きな氷があつてね、とろうと思つたらパチンと言うてみんな動いてなかなかとれなかつた。

・大きなのがとれたから、持とうとおもつたらつるとすべつてわれた。

・つるつるで持たれなかつた。

・手が痛くなつて持つて来る時にわれてしまった。

○そこで、もっと分厚く且つ美しい氷を探して翌日芦屋川へゆく。すばらしい氷の結晶だ。見たとたん私の方が感激する。

子どもたちは壊すのに一生懸命。帰つて話し合う。

・プールの氷は表も裏もつるつるでガラスみたいに向うが見えたけれど芦屋川の氷は表がつるつるでも裏は針状になつて一杯ついている。

・三角形をした太い針状のものが二段にも三段にもなつていて日光に当つて輝やいている。

こんな貴重な経験をしたことからペンギンの氷への思いがふくらんできました。

氷の美しさに驚いた子どもたちは
そんな美しい氷を作ろうと必死です



そこで氷と言えば、ただ四角と思っていたのがいろいろの形があり、しかも大へん美しいデコレーションがついていることから、空箱の氷はいろいろな形になりその上綿や銀紙やセロハンで針状のもの等デコレーションされて美しい氷になってきました。

影絵「小人と青虫」の場合

青虫の製作で伸びたり縮んだりするものを作りたいという子どもの気持があって、どうすればよいか教師はその為は何を用

意すればよいかに苦しみました。とにかくモールを出しておくことにしました。指に巻いてラセンにして引っぱってみたり、紙を巻いてみたりして長考の末、仕事にかかり始めました。青虫の遊びの経験があるので、そうしたいいろいろの思いを表現しようとして技術的にもたいへん難かしいように思いましたが、とにかく自分流に考えて作り出すことを励ましました。

A セロハンの筒にモールを巻きつけて両端に棒をつけて押すと伸縮するもの

B Aと反対でセロハンの筒の中にモールの巻いたものを入れてあって顔は平面のままつけたもの

C 二枚の紙を交互に折りたたんでいるもの（伸縮が強くておもしろい）

D 一枚の紙を折りたたんでモールの足をとりにつけたもの（あまり伸縮がきかないが青虫の感じは出ている）

以上のようないろいろの青虫が作られました。

そのどれも伸びたり縮んだりすることへの苦心の跡がみられます。子どもなればこそという自分で生み出した技術というか要領で仕上げているものができました。

こうしてできた作品は愛着があって毎日毎日大事に扱うのです。ちょっとこわれると修繕だ、そしてまた思いつくと加えて

ゆく、少しでも自分の思いを出そうとして遊びながらまた手が加わってゆくことが出てくるのです。

△役割について▽

昔配役についてずいぶん苦しんだことがありました。子どもは納得していても親が変な色目でみたりして、これは教師の悩まされた問題ではあります。しかし考えれば、これ程はかな悩みもないと思うのです。それは劇あそびというものの考え方の間違いから起っていることであって、教師自身が劇あそびとは子ども一人ひとりの持ち味を充分発揮できる場を見つけてやること、またその機会であることをしっかりと持つべきであります。

その為はその子の持味を確かに掴むこと。それが友だちの生活の中で生きて育っていること。そしてその役割が子どもへの何よりの自信であり、これは自分でなければできないんだという全体への責任とつながりを、しっかりと育てておくことです。

裏方にまわって充分満足し、その仕事はその子がするとタイミングも何もかもうまくゆくことが出てきます。こうして役割はできるだけ交代していろいろの子どもの持ち味から決めてゆきます。友だちのアイデアとか工夫を見つめる態度をも

たせたいものです。そしてどんな小さなことにでも、多くの子どもで考えたり認め合ったりしながら進めたいと思います。

「小人と青虫」の影絵で役割交代して遊んだ時のこと

いわゆる進んでその役割をもったけれど新米さんなので進行はスムーズにいかない。その割に持ち味のよきがあったりしておもしろい。けれども子どもたちの考えの中には、スムーズに流れないと、もうそれだけで下手だと思ってしまう単純な危険があります。「持ち味のよさを認める。」これは高度なことだけれど教師の構え方が子どものそんな眼も育て得ると思いません。

○進行係になった二人の女の子がノロノロしていたので、友だちからうまくゆかなかったと言われた時「わたしもはじめてでしょ、小人の人もはじめてでしょ、はじめてと、はじめてで、それだからわからなかったの。」と申し開く。子どもたちも無理もないと納得と同情をする。

小人の中心役（ローリー）をした子どものこと

お月さまからお餅をもらう時、他の小人と一しょにワーワー言ってもらったけれど、あれはおかしい。「ローリーはじっと見ているだけいい。」とみんなに批判されたことがあります。そこで「では○○ちゃんの気持を聞きましょう。」とい

うことで発言を求めると少しも恐れることもなく少し赤くなりながら「そうかつて、お月さまにお餅をもらうのに、うれしいのに黙っていたら、いかんから何か言ってもらった方がいいと思つたから。」と言います。ローリーとて聖人君子でもなく同じく喜びながら、しかし欲ばらなかつただけのこと。この子なりに考えたローリーであつたわけです。自分なりにまじめに物を考えてみる、これがどんなに尊いことか、私はうれしく思いました。皆の子どもにこの点を話し励ましておきました。

こうして役割の交代をして遊んでゆく中に、子どもたちの方から役割を決めてしようという声が強くなつてきます。そこでお互い見合いっこして推せんします。この時に驚くことは子どもはよいものに敏感であること、たいへんいい眼をしていることとであります。

友だちのそれぞれのはまり場へ大きな差もなく決めてゆくことに私は感心させられることがよくあります。こうしていよいよ決定してしまつと、その役を少しでも上手にしようとする構えが見えてきます。

○影絵で夕方をするのに色セロハンを横からもつてゆくよ
り、夕方はもつとゆっくり上から赤くなつた方がよいとい

うことに気がきます。

○餅まきのしごと　でも、一番昔の高いO君が大事に切つてくれたお餅を高い台に登つてまきます。もつと真ん中で上からの方がいいと見物の子どもに言われて、もう落ちそうになつて頑張つています。まき終ると早速拾ひ集めて次に備えておく、少し足らなくなると自分で作り全くもう自分の仕事になつてしまふのです。

こうして一つひとつの役割に自分がしなければと言う責任のようなものがあるのか友だちの行なつている時でも全く見物というわけにはいかず、自分の出番があつて、それもタイミングよく出なければなりません。こうした問題意識は子どもをたいへん緊張させます。少しでも出方が遅いと友だちに注意される。何時頃夕方になったらいいか、その役の子どもは一生懸命です。はじめはピンク、静かに水色にと感じを凝らし始めたり、この道具はもつとこうした方が使い易いとか、これ位あればちよつどいいとか自分でしか分らない適宜、適量、適切なものを擱んできます。

どんな小さな裏方の仕事でも一つの大事な役割と考へて、みんなで話し合つてゆきます。

みんなの子どもが何らかの役割をもつこと、それが大事なこ

とであることを、こうしてその役の内容の工夫によって、どんな仕事でも楽しくて立派であるということを考えさせたいと思います。見た目がよくて自立つ役ばかりをしたがる子どもをできるだけ早くどの役もたいへんだ、それぞれにいいなあと思える子どもに向けたいとおもいます。

この劇は自分たちでしているんだ、自分でないといけない仕事があるんだというこの参加の気持が大切であります。

こうして劇あそびを育ててゆきます。

劇あそびを計画する時に次の場合があります。一つは物語を選び、それをいろいろに遊んでみて子どもから生まれたものを組み入れて次第に劇あそびへと構成してゆく場合と、もう一つは、ごくまとか、りすとかの遊びが自由に行なわれているのを捉えて、そのものをより中広く豊かに考えられるようにいろいろな物語りを聞かせます。そして子ども達の遊びの中から、ストーリーを作ってゆくものです。しかし今ここでは、前者の物語りに沿って劇あそびを構成してゆくものについて考えてみたいと思います。

1 お話を選ぶこと

何より大事なことはよいお話を選ぶことでありましょう。

その決め手になるものは、その話のもつ内容と心とがたいへん子どもの共感と意欲を呼び起し、夢が拡がってゆくものでありたいと思います。子どもが好きだけであっても、その中に大事な内容や心がなければ、それは劇あそびとして生活させてゆくだけの価値がなく、きまって途中で行きづまってしまいます。子どもが遊んでゆく程におもしろく、またストーリー以外にもどんどん発展してゆける位、巾のあるものを多くの童話の中から真剣な気持で選びます。

こうして話が決まると、その話の心をまず、しっかりと教師が掴んでおくこと、私はこのところの気持を掴ませておきたい。この心を何とか分らせたいとかいうその話の分析を充分いたします。

そうして話の底に流れている一番大切なものをしっかりと掴んでおき、そこから毎日の遊びの具体的な目標が生まれてきます。

2 自由遊びで充分させること

こうしてお話が決まると、お話をよく聞いた子どもたちは早速遊びを始めます。それぞれの捉え方において遊びが行なわれます。

積木や机、椅子までも動員してそれらしく場の構成を考えま



劇遊び「りすの話」
を自由遊びで遊んでいるところ

す。お友だちとも話し合って遊び方が考えられます。ストーリー通り運ぶなんてことは滅多にありません。その話の中で最もおもしろかった場面とか自分の好きなことから始まってきます。この子どもが自分で掴んだ捉えたものの上に立っての自由な遊びの姿の中から、いろいろ問題を拾ってゆきます。それを

話の心に結びつけて教師の構えの中に入れておきます。そして、みんなの子どもと話し合い一つ一つの問題をみんなの問題として考えるようにさせます。

そこで、それに関連したお話を聞かせることが必要になってきたりします。物によっては見学にゆくこともあります。こうして少しでも確かに知ってほしいという構えが大切になってきます。つまり内面的把握をさせるために実際に見させ遊ばせ考えさせてゆくわけです。

例えば冬ごもりする動物をするのにその土台になっている山を感じにいったことがあります。お山が寒くなってきて動物たちが身を守るためにいろいろの仕事をし次第に山は静かに寒くなってゆくという気持は、実際に木の葉を落とした冷たい風の吹く山へゆき、みの虫が風にふかれていた様子、静かで寒い山を見ることが何よりと思ったからです。

子どもたちは寒くて静かでこわかったという山の感じをもつて帰りました。

こうしてできるだけ身体で遊ばせて、感じさせて解決してゆきたいと思います。

口だけの話し合いは劇あそびでは禁物です。

何故なら、そのことは理屈ではなく、子どもが本当に自分の

問題として身体で知ってこそ感動があるわけですから

そのためにも、これには時間がかかります。ゆっくり遊びに時間をかけて確実に一人ひとりの子どもの動きを見つめましょう。そして小さなものでも見落さないで追求してゆきましょう。自由遊びが充実してくると次第に動作やことばのいろいろが自由に出てきます。またお話としてのふくらみも見えてきます。

3 劇あそびとしてまとめてゆく

こうして遊びが充実してくるとその中から生まれてきたものがたくさんになってきます。お話の通り運ぼうとするよりも、こうして生まれたものをどんどん組み入れて話を構成してゆきます。この生まれたものを、小さな動作一つにしても、ちょっとしたことは、また思いがけない小事件、そんないろいろなものを話の底に流れている心に沿って、どれだけ有効にうまくアレンジしてゆくかということがこの劇の見どころになってきます。

私たちの園では衣裳をつけて行なったことはありません。子どもはそんなものでカハハしなくてもなり切った姿こそ何よりそのものなのだからです。そのような衣裳を着ることによって一層その気持になれるということがあるかも知れませんが、も

っと自分の内面においてそのものになることの方が、ずっと強いものだと思いますし、そのために長い間遊びを積み重ねてきたわけです。

以上劇あそびを作り上げてゆく大体の過程を申しましたが何にもまして大事なのは、自由に遊ばせるといことです。つまり自由遊びで充分させること、子どもが自分なりに思ったことで充分遊ばせることです。一人ひとりの子どもが自分自分の捉え方で遊ぶその中から本物のことばや動きや製作が生まれてきます。私たちは劇あそびには子どもの生み出そうとする精一杯な本物の姿が見たいわけです。この本物の姿を生み出すのには自由遊びで練るより外にありません。子どもの中から生まれたというだけでなく更にそれを深く掘み工夫したものにするためには充分時間をかけて育てるより外にありません。言いかえれば自由遊びは子どもがものを生み出し精一杯生活することを知る尊い時でもありましょう。こうして劇あそびは、幼稚園生活の最後のしめくくりとして、子どもが本当にこれで成長し喜び感動するものでありたいと思います。

(芦屋市立精道幼稚園)